

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 9 日現在

機関番号：32642

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370294

研究課題名(和文) 21世紀翻訳理論の展開と「歴史」再読についての考察

研究課題名(英文) Translation Studies: Perspectives in the 21st Century and Re-reading History

研究代表者

早川 敦子 (Hayakawa, Atsuko)

津田塾大学・学芸学部・教授

研究者番号：60225604

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)： 加速するグローバル化の波は、多文化・多民族・多言語の共生を大きな課題としてきたが、文学においてはそれが「翻訳」を介しての「世界文学」への注視を導いた。「世界文学論」が、英語を中心とするヘゲモニーの解体を促す多様な文学の存在への関心を喚起すると同時に、いわゆる大きな「歴史」ではなく、個々の民族の「歴史」へと再記述される試みを照射してきた展開をあとづけ、その流れと翻訳論の協働性を考察した。

研究成果の概要(英文)： In the gigantic waves of multi-cultural/lingual/ethnographical globalization in the 21st Century, inter-relations with "the others" have been much more focused than before. In the context of literature, so-called "World literature" as genre has been discussed and explored, in which "translation" is inevitably a disputing concern not only for the academics but also for the writers.

One of the big challenge was to deconstruct the hegemonic Anglophonic canon of English literature, while those writers who are concerned with their culture and heritage in the minor languages have been powerfully creating stories to be translated into "English". In the process, what had been considered as "History" has been re-read from different perspectives, and the "histories" of the oppressed have been revealed in stead.

This project has focused on how translation studies stimulated and encouraged such new movement in the context of world literature in the present century.

研究分野：翻訳論・英語圏文学

キーワード：翻訳論 英語圏文学 世界文学 歴史の再読 グローバル文学 ヘゲモニーの解体 翻訳文学

1. 研究開始当初の背景

(1)課題設定の背景は、先立つ基盤研究 C (平成 23 年～25 年度)「21 世紀英文学における『翻訳論』の現代的課題・理論的展開及び相互関係性の考察」において、翻訳論が学問的研究領域として英文学研究と密接に関わって相互に影響を及ぼしていることの現代的課題に鑑み、さらにその成果として、21 世紀においてとくに 20 世紀の歴史の再読を促したことを照射するものである。翻訳論においていわゆる「他者」を目標言語で語る言説が注視されることにより、本課題において中核に据えたのは、ホロコーストの第二世代の作家である Eva Hoffman が、9 - 11 後にホロコーストの歴史の再読という観点から現代社会に問う言説を展開している流れである。

第二言語で書くことの意味、またそこから繋がる「自己翻訳」のテーマなどを通して、どのように歴史の再読と翻訳論が関わっているかを研究することを目的とした。(2)とくに本研究課題の特色ともいえる文脈は、英文学の英語中心主義の世界観やキャンオンが、翻訳論を迂回することで解体され、英文学批評の射程に翻訳論が大きな影響を及ぼしていることの考察である。とくに歴史の再読は、新たな歴史的文化的知の水脈を、翻訳論が活性化したことの有効な側面である。

2. 研究の目的

(1)戦争の世紀と言われた 20 世紀のあとにもいまだに紛争が続く 21 世紀にあって、[歴史]の検証はグローバル化における多文化・多民族・多言語の共存に必然的に係る課題である。たとえばホロコーストの負の遺産はどのように現代社会に意味をもつのか。この課題に対する応答の一つが、歴史を他者の視点から捉える戦後世代の文学と、その翻訳的視点だといえる。とくに被抑圧者の言説が翻訳を迂回して照射される過程を通して、翻訳学が理論的な展開で密接な関係をもつことは注目に値する。本研究の目的は、翻訳学という新たな研究領域が、上記の流れに連動してどのような貢献を果たしているのかを明らかにすることである。

(2)上記に補足的に付随して繋がってくる問題として、現代社会における負の要素、たとえば日本における 3 - 11 が社会的に与えた不安や被爆の経験は、翻って世界にどのように受け止められているのか、震災後文学へのアプローチを、翻訳論から考察することも射程に入れる。

3. 研究の方法

(1)歴史再読をテーマとする言説の分析

「歴史」という広汎な領域から、ホロコーストの第二世代の作家 Eva Hoffman を取り上げ、ホロコースト第二世代の立ち位置

から彼女が取り上げている「負の言説」に焦点を当て、そこに「翻訳の視座」がどのように関わっているか 第二言語で書く作家の一人として、Hoffman は翻訳についても独自の経験を *Lost in Translation* などの著作で言及している を考察した。

(2)作家招聘の協働プロジェクト

次の段階として、歴史の再読を翻訳論で読み解く過程で得られた知見をもとに、異文化の視点から日本の「負の歴史」をどのように考察するか、Hoffman 自身を招聘して広島、長崎、福島を訪問、日本の被爆者の第二世代との意見交換や詩人の若松丈太郎とのコラボレーションなどの機会を通して本課題についての協働プロジェクトを行った。

日本での講演「第二言語で書く作家であることについて」、「現代の自由について考える」、「記憶・トラウマ・認識による癒し」はそれぞれ、この協働プロジェクトの趣旨に則して行われたものであり、すぐれて興味深い視座が得られた。帰国後に日本での滞在記が記され、講演録を併記して『記憶の鎮魂歌 - ホロコースト第二世代が訪れた広島・長崎・福島』(岩波書店、2017 年 3 月)として翻訳出版した。

その中でも指摘される重要な観点は、"off Japan"という、Hoffman 自身の概念であるが、それがいわゆる歴史学の領域でも歴史の再読の方法として使われる"off Modern"という概念を踏襲したものであり、英語帝国主義の解体の中で問い直された歴史観を反映させた観方であることは本研究課題においても貴重な知見であった。

(3)「世界文学」へのアプローチ

以上の過程を通して、近年新たな広がりをもって日本でも議論されている「世界文学」の命題に繋がった。

翻訳がこの[世界文学]に必然的な要素であること、ならびに翻訳論の重要な課題である「翻訳の不可能性」が翻って「他者性」を顕現させることによって文学の新たな領野を拓き、Moretti らの世界文学をめぐる理論でも照射される「遠読」の拡がりから文学を捉えなおす流れと繋がってくるのが明確になった。

このような観点から、今後「日本文学の世界文学性」を考察するテーマの示唆が得られたが、その起点として、UBC (ブリティッシュ・コロンビア大学、カナダ)の日本研究の専門家である Christina Laffin との共同研究で、日本の震災後文学、とくに「詩」の英訳を、日英語双方の文化的背景および「翻訳の不可能性」の観点から行い、意見交換を行った。共同プロジェクトは「日本研究」(Japan Studies in English)として今後も続ける予定である。

英語圏以外の世界文学への射程を広げ

る目的で、研究者自身も発起人となった「世界文学・語圏横断ネットワーク」(CLN)の年二回の研究集会で他言語の研究者との意見交換を行うほか、「翻訳」をテーマとするシンポジウムに参加し、英語圏文学をさらに広い射程から観ることの重要性と意義を考察した。

4. 研究成果

(1) 成果と研究により得られた知見

研究テーマとして掲げた「歴史の再読と翻訳論の協働関係」

20世紀が問い直される必然的な背景として、21世紀のグローバリゼーションがもたらすさまざまな問題があった。移民問題、国際紛争、多民族国家の権力構造がもたらす亀裂と分断、そこからさらに反作用として促される保護主義などがその例である。Hoffmanの日本での講演の一つである「今日の自由を考える」(“Thinking about Freedom Today”)は、まさにこのような世界情勢に対するホロコースト第二世代からの分析であり、過去から現在を照射する視点での歴史の再読が、現在を見る視点の根幹におかれている。

過去へと視座を広げる営みは、「自己」を中心とした歴史の基軸を「他者」へと移行させることで、現在を「他者化」して観る行為となる。翻訳は、まさにそういった意味で「他者」との関係性の構築を模索する過程に介在する行為であることが明らかである。たとえば翻訳理論において Sherry Simon が指摘する「もともとは分離していたもののコンタクトゾーン」、或いはまた Andre Lefevere の「屈折」(refraction)の概念などは、まさに翻訳論からの理論的な説明で、歴史の再読がどのように現在に影響を及ぼしているかを示唆するものであろう。Hoffmanの越境的見地から再読する「ホロコースト」の歴史は、現在の世界を理解する上でのすぐれた知見にみちた方法論を提示しているが、それは「翻訳的」過程が現在において「翻訳の政治学」(Lawrence Venuti)としての有効性をもつことを示唆している。このような結論を見出したことは、本課題の成果としてひじょうに有益なものであった。

こういった視点に立って、たとえば Spivak のサバルタン研究や、Edward Said の「故国喪失」のテーマも再読を促すテキストとして読み解くことができる。英語圏文学の文学・文化批評との協働性をそこに発見できる。

もう一つのキーワードとして翻訳論が有効性をもつのは、「他者への注視」であるが、他者を目標言語のテキストにおいてどのように前景化させるかという問題は、まさに Damrosche らが提起した World literature が現代において2世紀前のそれとは大きく異なる展開をとげてきたこと

を立証するものである。すなわちゲートの時代にドイツロマン主義を背景にして概念化された「世界文学」とは異なり、相対的自/他の関係性を意識化させる翻訳を通して、「世界文学」研究への関心が喚起されてきた。翻訳論は、こういった文脈でしばしば言及されることで活性化され、作家はある種「世界文学」の読者を想定して作品を創作していく過程に意識的にならざるを得ない。それが現代文学の変容にも影響を及ぼしているのではないかと。翻訳者と作者、さらに市場原理を踏まえた出版者の関係性が問われるようになった背景にはこのような変化があることが透視できる。つまり、翻訳論の展開を跡づけることは、同時に世界文学の動向を考察することにも繋がる。「世界文学」へのアプローチが翻訳論によって提供されているといえるだろう。

英文学研究への貢献：

英文学研究を大学教育にどのように組み入れていけるのかということについて、もはや「英文学」のキャンオンと絶対性、伝統が揺らぎ、カテゴリーとしてくることがむしろ現実から乖離していることも、深刻な問題である。本課題の成果の一つは、そのような現状にどのように向き合っ大学におけるリベラルアーツ教育を展開していけるのかということの問題点が明確になったことである。

Hoffman は、たとえば Nabokov や Beckett らの翻訳的言語についての分析を行っているが(日本での講演「第二言語で書く作家であることについて」) 作品を構築する言語そのものの他者性を意識的に読む行為の必要を彼女は「哲学」の教育として捉えている。大学教育において、テキストの精読は英語の言語教育としてのみならず、翻訳という営みの一つの形である

別の見方をすれば、翻訳はまさしく Spivak がいうように「精読」であることに鑑みれば、文学のカリキュラムはさらに翻訳を内包した視点で再編できるのではないかと。たとえば「英文学史」を、翻訳論が文学批評を再読したように再・解釈する方法もまた、現代に至る世界の変容とリンクした方法論として可能であろう。

他方、世界文学性を問うという意味では、英文学を「世界文学」の文脈で再評価すること、さらに視野を広げて日本文学を受容を翻訳論を通して検証してみるなどが、今後のテーマとして浮上してきた。それは、グローバリゼーションの中の日本を捉える上でのヒントにもなると考える。

(2) 成果の意義と位置付け

成果については、国内外での発表などを通して公開し、とくに英文学研究者ではない学際的な視点で、フィードバックを得ることを重点的に行った。Hoffman の招聘の

ほか、上記の UBC の日本研究の研究者である Christina Laffin, イギリスの翻訳・通学の重鎮である University of Manchester の名誉教授 Mona Baker の来日の折の講演会の開催、UCL (University College of London) で開催された Translation Studies Congress の招聘を受けての発表、下記の NY の Journal への投稿などである。

日本という特殊言語の領域から「翻訳論」に関わることが、その立ち位置ゆえの独自の視座を拓くという意味で研究成果の学際的な意義があるといえる。上記の国外からのフィードバックも、いわゆる「日本語」から見た「翻訳論の有効性」についての関心が高く、日本の近代化において非常に大きな役割をもった「翻訳」が、翻訳論的にみるとどのように解釈できるのかという問題については、日本の近代史の「再読」という意義をもたらしたといえる。

位置づけとしては、[英文学研究]の範疇を超える研究のありようが必要であることを再認識させられた。もはや「英語」のみに限定された文学研究には、翻訳論及び世界文学研究において限界がある。少なくとも、英語を母語話者としていない作家の複層的な視点を英語で読み解いていくなどの方法論から、多角的な研究の視点が要求されている。本課題において Eva Hoffman を対象とできたことは、このような意味においてひじょうに幸運であったといえるだろう。まださらに精力的に活躍を続ける作家であることから、今後も研究の展開を期待したい。

(3) 今後の展望

上記にも挙げたように、「世界文学」を論じていく際に、日本文学の世界文学性を考察していくことは必至であろう。翻訳論的見地からも、日本語のテキストが翻訳として読まれている多くの事例を分析し、翻訳テキストとの比較、相違、またその相違はどこからもたらされるのかなどの議論が必要であると考え。今後の研究課題として、とくに戦後日本文学の中から翻訳され、評価を受けている作品 村上春樹はその筆頭であろうが、むしろ池澤夏樹編集の「世界文学全集」に収録された石牟礼道子などを翻訳論から考察することは、興味深いテーマの一つである。

本研究課題で得た知見をもとに、「翻訳理論の展開と英語翻訳文学および世界文学の協働性についての考察」をテーマに、日本文学の翻訳作品をふくむ「英語翻訳文学」と「世界文学」へと射程を広げて、翻訳論の現在を追う予定である。研究領域としては、「日本研究」もその過程でカバーすることになる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

早川敦子「他者への試練 遠藤周作『沈黙』に見る翻訳的空間」、津田塾大学『紀要』、査読有、第 46 号、2014、33-56.

ATSUKO HAYAKAWA, “New Translations of Japanese Literature: Socio-cultural Impacts on the Japanese Mind”. 査読有 *Journalism and Mass Communication*. Vol.5, No.12, David Publishing Company, 2015, 12 月 (640-649)

[学会発表](1 件)

ATSUKO HAYAKAWA, “The Perspectives of Literary Translation Research”, British Association of Japanese Studies (BAJS) Annual Conference 2015, September 11, 2015. SOAS, University of London.

[図書](計 1 件)

早川敦子 (11 名、巻末)「世界文学への扉を開ける」『架空の国に起きる不思議な戦争』開文社出版 (283-318)

[その他](計 3 件)

翻訳 早川敦子『希望の鎮魂歌 ホロコースト二世が訪ねた広島・長崎・福島』(Eva Hoffman, *Songs of Mourning, Songs of Hope*) 2016 年 3 月、岩波書店 (163 ページ)

翻訳 早川敦子『こどもの時間』(Emily Grosholz, *Childhood*) 2015 年 12 月、クルミド出版 (103 ページ)

監修・監訳 早川敦子 (5 名)『子どもの本がつなぐ希望の世界：イエラ・レップマンの平和への願い』彩流社、2016 年 3 月 (227 ページ)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

早川敦子 (HAYAKAWA ATSUKO)

津田塾大学・学芸学部・教授

研究者番号：60225604